



児童教育用の教本『絵本いろは歌孝行鑑』 明誠舎の看板が見える

【目次】

巻頭言……………理事長 堀井良殷…………… 1

豆事典…………………………………………………… 1

「近江商人と石門心学

（矢尾喜兵衛家）」

……………末永国紀…………… 2

『半兵衛麴』第十一代当主

玉置半兵衛さんを訪ねて」

……………阪口昭広…………… 3

「明誠舎で何を学ぶか」解は自らの

掌にあり」……………清水正博…………… 6

行事の記録……………………………………… 7

編集後記……………山田節子…………… 8

（題字 和田亮介）

絵本いろは歌孝行鑑

「れくら」の部

- れ れうけんをすればそのみのとくなるぞ がまんをすればみをがいすもの  
（了見をすればその身の得なるぞ、我慢をすれば身を害すもの）
- ろ ろろばんのけたにはずれしたわけもの、わってあはせてころしらべよ  
（算盤の桁にはずれし戯け者、割って合わせて心調べよ）
- ろ つとめがたよければしうもよろこびて、またたいせつにするはことわり  
（勤め方良ければ主も喜びて、また大切にすることは理）
- ね ねざめにもおやのこころをやすめかし、かならずおやにくらうかけなよ  
（寝覚めにも親の心を休めかし、必ず親に苦勞掛けなよ）
- な なぐさみもみのほどほどにひきくらべ、たのしみすぎてくるしみをする  
（慰みも身の程々に引き比べ、楽しみ過ぎて苦しみをする）
- ら らくしんをみてはたらけよせいだせよ、またらくしんになるとしらすや  
（樂人を見て働けよ精出せよ、また落人になると知らずや）

## 巻頭言

(一社) 心学明誠舎 理事長 堀井良殷

最近のニュースを聞くたびに、心の痛む事件が国内でも海外でも相次いでいます。世界の経済も行き詰まりを見せる中で、新しい出口を求めて模索が続いています。不安定な未来に向けて心のよりどころをどこに求めたら良いのでしょうか。

私たちは心学のなかに一つの答えがあると思っ  
ています。最近、公益資本主義や企業のCSR或いはソ  
ーシャルインパクトが話題になっていますが、その淵  
源を石田梅岩の心学に見ることが出来ます。

人のために尽くしてこそ自らも正当な利益を得る  
ことが出来るとする石門心学は、経済活動の倫理を説  
いた社会教育活動として関西から始まり全国にひろが  
り、大坂商家の社訓家訓にも大きな影響を与えました。

心学明誠舎は一七八五年大坂の町人によって創設  
された心学講舎で、以来連綿二三一年、今なお活動を  
続けております。

一九〇五年文部省より社団法人の認可を受け、現在  
は一般社団法人の認定を受け、会員総数一六七名で、

すべてボランティアにより運営されております。  
年間を通じて講演会やセミナー、勉強会を開催する  
ほか、『こころをみがく』と題した講演集を発刊してい  
ます。

各位におかれましては、さらにこの絆を広めるため、  
心学明誠舎の活動に今後ともご参加くださいますよう  
お願い申し上げます。

### 【豆事典】『絵本いろは歌孝行鑑』（表紙写真

心学講舎では児童教育に力を入れた。手島堵庵は、  
安永二年（一七七三）以来、毎月三日、七歳から  
十五歳の男女児童を集め、家庭における日常の行  
儀や心がけを説き示した口話を行った。それを前  
訓という。口話筆記を編集し『前訓』という書名  
で発刊した。心学口話では因果応報・功利主義の  
みによらず、良心や人間性の本然に求めて、自覚  
を促そうとしているのが特徴。表紙写真の書も児  
童教育書として江戸後期、大坂書林から発刊され  
たもの。左頁挿絵に明誠舎の看板が見える。（岩  
波書店『石門心学』解説から一部引用）

「近江商人と石門心学」 ～ 矢尾喜兵衛家 ～

同志社大学名誉教授

近江商人郷土館館長

末永国紀

近江商人と石門心学との関係を直接示すものとして矢尾喜兵衛という家がある。初代は矢野新右衛門という同郷の近江商人の家に奉公に出て、一七四九年に暖簾分けて酒造業とよろず卸小売商を秩父で開始する。矢尾家は、初代の衣類を今でも保存している。木綿なので普通なら傷んでいるはずだが、手入れして保存しているのは、先祖の辛苦を忘れないということだ。

矢尾百貨店は秩父で唯一の百貨店として現在も存続し、二七〇年の歴史がある。天保四年の飢饉のときに秩父の貧民を救済したという記録が残る。

地元配慮した経営をしていたので、四代目喜兵衛の代になり、明治十七年に秩父事件が起きたときも、秩父の店を救うことができた。当時、「松方デフレ」政策がとられていた。板垣退助らが結成した自由党の急進派が、困窮した農民と一緒に「秩父困民党」をつくって反乱を起こした。

十一月二日、秩父の中心部の大宮に反乱軍が乱入する。大宮で一番大きな店を構えていたのが矢尾喜兵衛家だった。反乱軍は他国者（よそもの）である矢尾家

を襲うことはなく、ただ炊き出しを頼みに来た。打ち壊しを受けたのは地元の高利貸し業者だった。

四代目のとき、矢尾家が秩父に出店してから百年以上経っている。それでも自分たちは「他国者」であるという意識を忘れてはいけないと絶えず従業員に話して聞かせ、地元に対して非常に手厚い対応をしている。

四代目は筆まめで、『心学見分草』、『商主心法 道中 独問答寝言』、『見聞随筆』、『古今教諭歌』、『岩城枅屋 店掟写』など多くの原稿を残している。細かい字で、自分の思いや出来事を写している。これを見ただけでも心学に対して非常に造詣が深かったことがわかる。

四代目が四十八歳で亡くなったとき、息子は八歳だった。四代目は亡くなる前に息子の養育を弟の矢尾治兵衛忠直に託し、弟は一生懸命、五代目喜兵衛を育てるが、明治初期に自らの衰えを感じて遺言を書く。四代目が心学本を好んで毎日読んだことを挙げ、心学の本は精を出して毎日読むことが大事だとし、さらに「相応の主人たるもの、是非とも心学は知り申さずては家業長久覚束なく候」。つまり、心学を知らなかったら家が永く続くことはおぼつかないと、はっきり語っている。

（本原稿は二〇一六年六月一日開催のセミナー「近江商人と三方よし」より抜粋しました。全文は後日発刊の『こころをみがく』に掲載予定です）。

「半兵衛麩」第十一代当主 玉置半兵衛さんを訪ねて  
阪口昭広

京都の「半兵衛麩」は、元禄二年（一六八九）創業のお麩屋さんです。創業以来、水と素材にこだわり、伝統の味を守り続けておられます。その経営に「石門心学」の教えを活かしておられることで有名です。心学明誠舎でもご当主・玉置半兵衛さんにご講演をいただきましたが、今回はお店を訪問し、商いの現場でお話をお聞きすることにしました。

秋の深まりを感じさせる穏やかな午後、取材に向かいました。京都川端五条交差点の喧騒を東へ一筋、古都の風情を色濃く感じさせる通りの一角に、元禄二年から続くお店があります。京都町屋と昭和のレトロビルディングが融合し、趣ある風情です。店内はお客さんで賑わっていました。奥の重厚な応接室で第十一代当主・玉置半兵衛さんにお会いしました。

当日はテレビ取材や重要会議で多忙を極めるスケジュールとのことでした。その中で、我々の取材を快くお受けいただいたことに感謝しつつ、インタビューを始めました。



**記者** 心学との出会いについてお聞かせいただけますか。

**玉置**「当家では『家の教え』として受け継がれてきた教えがあります。それは人として生きる上での気構えであり商いの道でもあります。代々親から子へ学問ではなく教えとして伝承されてきました。だいぶ後になり石門心学に触れた折、教えと心学の深い結びつきに初めて気づいた次第です。そして心学を学ぶほどに家の教えの大切さ奥深さを改めて実感いたしました」

**記者** ご当主のお幾つぐらいの時から、どんな風にごえを受けられたのですか。

**玉置**「幼少期からです。独特の伝承法かも知れませんが、言葉だけでなく、『眼で覚える』というものでした。たとえば掌に指で書かれ、魚釣りに行けば水面に釣り竿で、冬になれば火鉢の灰の上に、火箸で書いて教えられました。時には背中に指で書かれたこともありま

す。触覚で覚えることになりませんか」



記者 お許しいただ

ける範囲で半兵衛家の  
の教えについてお聞  
かせただけですか。  
玉置「・お客様は喜  
ぶものを作る。」

・悪いことをしても、  
大きく儲けても長続  
きはしない（地道に

正道を歩む）

・儲けることを目的にしない（三方よしの精神でやれ  
ば、お金はあとからついてくる）

・人の為と言わざるなり、自分の為と思うべし（ご縁  
を大事にし、相手の為にすれば、結局自分の為になる）  
「どんな言葉が熱を帯びてきます。」

玉置「・自分で自分を律する。」

・人に勝とうと思わない。まずは自分に勝て。自分に負  
ける人間は他人に勝てない。

・知識だけでよしとせず、実践をとまなうべし。

・機械では伝わらない手作りの尊さを大切に。

・あかんかったら死んだらよいやん。死んだつもりで  
頑張れば成就する」

その一つ一つの教えに込められた意味を丁寧にご  
解説いただき、心学との深い結びつきが伝わってきま

した。

記者 その教えを、どう商いに活かされていますか。

玉置 「自分にとって損得、儲かるか？儲からないか？  
ではなく、人としての善悪で判断します」

記者 大切にされている言葉などございますか。

玉置 「半兵衛麩にはふたつの家訓があります。

・先義後利（せんぎこうり） 義を先にして利を後と  
する者は栄える。商いで言えば、人様のお役に立つ商  
売をし、それによって得た利益を世の中に使うという  
ことです。

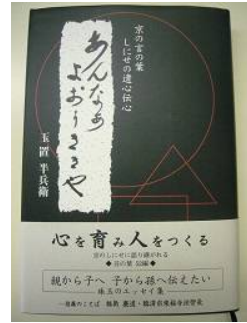
・不易流行（ふえきりゅうこう） 不易とは変わらな  
いもの。流行とは移り変わるものこと。我々の商い  
で言えば、ご先祖から代々受け継がれてきた大切な教  
えや考え方は決して変えることなく守り続け、一方、  
新しい技術の研究や、現代のニーズに合わせた商品開  
発に励み、常にお客様に役立つ存在であるよう革新を  
続けていくことです。

この家訓を半兵衛麩の本道として継承していき



いと考えます」

お話は幼少期から激動の昭和の時代、さらに現在までと続きました。戦時中、先々の商いをも顧みず、大切な製造道具の大鍋を、率先して国に物資提供されたことに強烈な感銘を覚えました。



れば幸いです。

本店併設の資料室では、所蔵の重要物も拝見させていただきます。いただき、貴重な体験をさせていただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

素敵な時間は流れも速く、取材を終え、気が付くと夕暮れ間近。半兵衛麩はまだ変わらない賑わいを見せていました。お店を辞す際、半兵衛さんは店先に立って手を振り、私たちが通りの角で見えなくなるまで、お見送りいただきました。

### 【おわりに】

実はこの取材は、本号に掲載すべく、随分以前に行

いました。ところが、いろいろな事情で発行が遅れ、今回やっと掲載出来ることになりました。

玉置半兵衛さんには、心からお詫び申し上げます。

記事を書き終わって、改めて思うことがあります。

石門心学に基づいた「半兵衛麩」の家訓は、世界に通じる経営の指針だということです。今日本や世界を動かしている企業人たちが半兵衛麩の家訓を見習ってくれたら、世界はどんなに住みやすくなるでしょうか。

半兵衛麩では、代々石門心学が伝承され、今も生きているのが素晴らしいと思います。巨大企業の創業者たちの伝記などを読むと、それぞれ素晴らしい哲学を持っていきます。しかし、それは伝承されずに変容し、いつの間にか利益至上主義になっていきます。創業の精神を引き継いでいく努力をしてほしいものです。

半兵衛さんは子どもの頃から父上の薫陶を受けられました。三つ子の魂は百まで。幼い頃からの教育は大切です。江戸時代、心学明誠舎も前訓という児童教育に力を入れていました。本号表紙の写真は、子どもが親しみやすいよう、いろは歌で教える絵本です。我々平成の心学講舎も、いずれは子どもや若者対象の活動が必要になるかも知れません。半兵衛麩の取材を通じて、そんな感想を持ちました。

明誠舎で何を学ぶか、解は自らの掌にあり、

(二社) 心学明誠舎専務理事・事務局長 清水正博

明誠舎は江戸時代の開講から梅岩哲理を発信し続けてきた心学舎である。何故ここまで現存できたのか。

木南卓一先生は、梅岩が著名で彼の伝記や研究論文が数多く発表されている理由を、「梅岩の求道的な生活哲人の境涯、教化への熱意が、時・処・意を超えて多くの人々に感銘を与える故であろう」と述べている。

そんな「熱意」や「感銘」の波動により平成の今、梅岩への関心の高まりが感ぜられる。大きな時代の転換期に立っていると言えよう。

三百年前の封建時代に梅岩のような偉大な人物がいたことは、時代の趨勢に洞察力のある者にとつて、驚異であつただろう。アダム・スミス、ベンジャミン・フランクリン、マックス・ヴェーバー、ピーター・ドラッカーなど海外の哲人に比す研究者もいる。

士農工商の階級社会、商人が最下層におかれた身分制度の時代において、梅岩は商人の地位を高めた。商人が行う流通行為の社会的役割を内外に認知させ、正道実践の動機付けを為した。商いの成否は天地の法則、天命に合(かな)うかどうかで決まると知らしめた。

天地自然と一体化した商道に則ることが永続的に

繁栄し、子孫長久の王道であることを教えた。

聖人に学び、儉約、正直、勤勉といった徳目の実践はもとより、自ら修養することで自性を知り、如何なる状況下でも「先を立てる」不動心を養うことが肝要であることを伝えた。

梅岩自身が農家で育ち商家に勤めた四十有余年の体認より、誰でもが志せば天命を知ることができる、商の道言えば士農工にも通じると、万民に「もし聞く人なくばたとえ辻立ちして成りとも我が志を述べん」の決意を持つて、晩年十五年の教導の道を歩んだ。

「富の主は天下の人々である」。個人の資産は天下万民の蓄えだと私欲を超越した崇高精神を説いた。また「神儒仏は心の磨ぎ草」であると宗教本来の役割、利他の心を喚起した。真に「性は善なり」である。

梅岩による女性への教育を揶揄する儒者に「紫式部や清少納言は男か」と反駁した。教育の機会の与えられない貧しい人や女性にも光被を照らしたのであつた。明誠舎社中では、実践哲学者で知の巨人である梅岩が心魂より語つた訓戒を現実世界に活かしてきた。先人に倣い、「師の求めたるところは何か」を希求していきたい。その解は自らの掌にあるはずだ。

先師及びその道統を繋いできた全国の高弟達の刻苦の跡を受け継ぎ、未来を切り開くべく、同志同友と共に、心学の松明を掲げ続けてまいりたい。



## 行事の記録(平成二六・二七年度)

平成二六年度

【ひらのまちギャラリー・サロン】

●平成二六年五月二三日(金) 講師：中井正嗣氏(千房株式会社代表取締役) 演題：経世済民

【サマーセミナー】

●平成二六年六月二三日(金) 講師：中村春作氏(弊舎理事・広島大学院教授) 演題：近世日本における「教諭」の思想について

●平成二六年七月四日(金) 講師：和田充弘氏(同志社大学嘱託講師) 演題：近世往來物にみる心の教育

【心学普及講座】

●平成二六年五月三十日(金) 演者：林家染雀師 講師：下野讓氏(弊舎専務理事、ヒューマンスマート(株)代表取締役)

【都鄙問答研修会】

●平成二六年八月二三日(土) 第四回研修会 講師：高野秀晴氏(仁愛大学専任講師)

【公開講座フェスタ】

●平成二六年十一月十四日(金) 講師：吉川宗男氏(ハワイ大学名誉教授、国際メンターシップグラジュエートスクール学長) 演題：石田梅岩の心学とメンタリング・メビウスのメガネをかけて！

【石門心学講演会】

●平成二六年十一月二二日(金) 第七回 講師：藻谷浩介氏(株)日本総合研究所調査部主席研究員、NPO法人ComPus地域経営支援ネットワーク理事長) 演題：里山主義と日本の復活

【早春セミナー】

●平成二七年二月一三日(金) 講師：大塚融氏(弊舎理事) 演題：金子直吉の旺盛な起業家精神の挫折が遺したものゝ平成バブル経済の破綻にみる企業倫理の崩壊

●平成二七年二月二七日(金) 講師：前川洋一郎氏(老舗学研究会共同代表・大阪商業大学大学院非常勤講師) 演題：老舗学から見た日本型理念経営の流れ

【勉強会】

●平成二七年一月十五日(金) 第十四回 日本今様舞楽会における「伝統文化鑑賞会」と懇親会

●平成二七年三月二七日(金) 第十五回 講師：西田孝司氏(文化財保存全国協議会常任全国委員、松原市教育委員会社会教育委員長) 演題：泊園書院と大坂の学問・文化ゝ藤澤南岳・黄鶴・黄坡の金石文

平成二七年度

【ひらのまちギャラリー・サロン】

●平成二七年五月二二日(金) 講師：山岡正義氏(パートナーコンサルタント代表) 演題：魂の商人ゝ石田

梅岩の語ったことゝ

【サマーセミナー】

●平成二七年六月五日（金） 講師：高野秀晴氏（仁愛大学准教授） 演題：石門心学に見る「学問」と「教化」

●平成二七年六月二六日（金） 講師：アンディ・バンキット・セティヤワン氏（名古屋大学准教授） 演題：イスラムと商売と商人

【都鄙問答研修会】

●平成二七年八月一日（土） 第五回研修会 講師：高野秀晴氏（仁愛大学准教授）

【公開講座フェスタ】

●平成二七年十一月六日（金） 講師：宇澤俊記氏（弊舎理事・朝日新聞社社友） 演題：事件記者が読み解く石田梅岩

【石門心学講演会】

●平成二七年十一月二一日（金） 第八回 講師：玉岡かおる氏（作家） 演題：商人たちの近代維新く鈴木商店にみる不朽の精神と激動の波

【勉強会】

●平成二八年一月十七日（日） 心学明誠舎新春の「見学と懇親のつどい」 池田市逸翁美術館・小林一三記念館・池田市歴史民俗資料館見学と懇親会

【早春セミナー】

●平成二八年二月二六日（金） 講師：長野享司氏（衣

笠三省塾主宰） 演題：石田梅岩と論語

●平成二八年三月二五日（金） 講師：長谷川恵一氏（弊舎副理事長） 演題：留学生を活かして、大阪をグローバルに活性化しよう

編集後記 事務局 山田節子

肌を刺すような日差しがようやく柔らかくなった頃、数年ぶりに舎報が復活しました。

近年、企業の規律が見直されていますが、石田梅岩先生の教えは生きる上でのすべてへの教えと感じています。心学明誠舎の会員であることが、毎日の生活に勤勉・正直・儉約を実践させてくれています。

この教えに出会った時、両親から教えてもらったことと同じ、と感じましたが、それほどこの教えが日本人の根底に根付いていて、ごく当たり前のことになっていたのだと思います。

皆様と改めて学び実践することで、日本だけでなく世界に、より深く根付いていくことを願っています。

## 心学明誠舎発行物案内 石門心学文集『こころをみがく』

(若干、在庫がありますので、お求め下さい。各巻 600 円、送料 92 円)

第五集 2015 年刊……○里山資本主義と日本の復活(藻谷浩介) ○金子直吉の旺盛な起業家精神の挫折が遺したもの～平成バブル経済の破綻にみる企業倫理の崩壊～(大塚融) ○老舗学から見た日本型理念経営の流れ(前川洋一郎) ○泊園書院と大阪の学問・文化～藤澤南岳・黄鵠・黄坡の碑文～(西田孝司) ○魂の商人～石田梅岩が語ったこと(山岡正義) ○石門心学に見る「学問」と「教化」(高野秀晴)

第四集 2014 年刊……○二十一世紀の国富論(原丈人) ○商人としての学び～人はなぜ働き、なぜ生きるのか～(藤尾政弘) ○事業家の夢と志(小林宏至) ○グローバル人材の育成(長谷川恵一) ○経世済民(中井政嗣) ○近世日本における「教諭」の思想～「小学」本の普及と庶民教育(中村春作) ○近世往來物に見る心の教育(和田充弘)

第三集 2013 年刊……○市場化の時代に見直す江戸期商人道(松尾匡) ○民の学びと社会貢献～日本を支えるもう一つの力～(堀田昇吾) ○平生夙三郎～日本人の商道徳と教育～(藤本建夫) ○現代に生きる渋沢栄一(井上潤) ○大坂心学を源流とする阿波半田の心学～文化と経済の交流～(篠原俊次) ○金を貸す・時を貸す～人を育てる・企業を育てる～(勝田泰久)

第二集 2011 年刊……○石田梅岩の学問と思想に学ぶ(上田正昭) ○商業界精神と梅岩の思想(倉本初夫) ○食の商いを通じて学んだこと(小嶋淳司) ○なすびの花(玉置半兵衛) ○「都鄙問答」を読む～梅岩の学問観～(辻本雅史) ○絵入りの「学問」～手島堵庵の「施印」を読む～(高野秀晴) ○二宮金次郎のいきざま～何が「豊かさ」なのか～(中桐万里子) ○国難を乗り越えるために～なにわ大阪の教訓～(堀井良殷)

第一集 2009 年刊……○見直そう、石田梅岩の思想(平田雅彦) ○梅岩の思想と運動(辻本雅史) ○隠居と教育～生涯学習に向けて～、隠居による教化運動～手島堵庵について～(高野秀晴) ○隠居と教育～生涯学習に向けて～、「臍隠居」の話～隠居とは何者なのか～(高野秀晴) ○明誠舎をつくった人と書物(山中浩之) ○現代に生きる石門心学(清水正博) ○歴史に学ぶ大阪の人間力(堀井良殷) ○大阪に現存する市民塾「心学明誠舎」の通史と関わった人たち(中尾敦子)



## 『みち』第3号

平成28年11月1日 発行

編集・発行 一般社団法人 心学明誠舎  
理事長 堀井良殷

〒556-0011 大阪府大阪市浪速区難波中 3-13-1 エール学園  
3号館 701

Tel : 06-6632-0041

Fax : 06-6632-6100

E-mail : [meiseisha@ehle.ac.jp](mailto:meiseisha@ehle.ac.jp)

Homepage : <http://www.ehle.ac.jp/meiseisha/>